

医療扶助に関する見直しに向けた整理（概要） ～医療扶助に関する検討会（令和4年9月6日）～

これまでの経緯について

- 医療扶助については、従来より頻回受診等の適正化対策の必要性が指摘されており、令和3年から開始した被保護者健康管理支援事業については、固有の課題も少なくないことから、医療扶助に関する検討会において、その見直しに向けた議論を集中的に実施し、論点を整理したところ。
- 本検討会においては、前回改正（平成30年）以降の医療扶助の現状・課題を踏まえた対応として、主に以下のような議論を積み重ねてきた。
 - 医療扶助の適正化については、これまでに実施した後発医薬品の使用促進や頻回受診対策など、様々な施策の推進により一定の成果が得られている。
 - 他方、改革工程表2021も踏まえ、適正受診指導の徹底や被保護者健康管理支援事業の機能強化等による更なる適正化を推進することが必要。
 - また、都道府県のカバナンスを強化する観点から、医療扶助及び被保護者健康管理支援事業に関する取組を効果的・効率的に推進するため、広域の地方公共団体である都道府県による市町村等への支援及び指定医療機関への関与の強化が必要。
- 以上のような認識のもと、「被保護者健康管理支援事業」、「医療扶助の適正化」及び「医療扶助に関する都道府県による関与」の3項目について、それぞれ以下のとおり対応の方向性について整理した。

対応の方向性について

被保護者健康管理支援事業

- データ分析も含めた事業の企画段階から評価段階までの一連のプロセスにおいて、関係部局との連携を強化することが必要。このため、連携事例の横展開や、関係部局に求める役割の明確化を行っていくことが適当。
- データに基づく取組をより一層推進するために、国において標準化された指標づくりを進め、福祉事務所が当該指標を踏まえて目標・評価指標を設定した上で事業を実施し、評価していくことが適当。
- 頻回受診に係る相談支援や居場所づくりも含む社会生活面に着目した効果的な支援を始め、重複・多剤投薬等に係る支援、子どもや親への健康管理支援も進めていくなど、事業の機能強化を図ることが適当。

医療扶助の適正化

- 従来の頻回受診指導では効果が得られにくい未改善者に対し、保健指導・生活支援の視点を取り入れた丁寧な支援を行うことが適当。
- オンライン資格確認の導入により、頻回受診の傾向がある者への早期の状況把握及び助言等を行うことが適当。
- 頻回受診の受診回数基準（定義）は、これまでの取組の成果やケースワーカーの業務負担、他制度の状況等も踏まえ、見直しは不要と考える。
- 医薬品の適正使用に係る取組は、令和5年1月に導入される電子処方箋の活用による情報連携の仕組みも活用しつつ、福祉事務所において健康増進の観点と医療扶助の適正実施の観点から取組を推進することが適当。

医療扶助に関する都道府県による関与

- 都道府県による市町村支援の強化について、国による医療扶助及び被保護者健康管理支援事業の取組に係る評価指標例を参考に、都道府県が適切な指標を設定し、管内自治体の取組状況を把握した上で、その結果を共有するとともに、必要な支援を行うことが適当。
- 都道府県による市町村支援を効果的に進めるため、医療扶助審議会について、都道府県の医学的な専門知識等を補強し、広域的観点から管内市町村に対する必要な助言その他の援助等を行う機関とした上で、法制上、位置づけることを検討していくことも考えられる。
- 都道府県等による医療機関への関与について、専門性を有する関係者の意見も踏まえつつ、指導対象となる医療機関を選定する際に頻回受診者が多いこと等も考慮することが適当。また、指導によっても改善しない場合に、適正な対応を求めるための新たな措置等も検討していくことが適当。
- 被保護者の国保等への加入は、他制度の被保険者の保険料負担や保険財政に与える影響が大きいため慎重な議論を行うことが適当。これまでの福祉事務所における頻回受診対策等の取組の成果も踏まえ、まずは、被保護者健康管理支援事業の取組強化や都道府県による市町村への支援等を強化することが適当。

1. 政策体系の概要

政策目標：教育政策における外部資源の活用やP D C Aサイクルの徹底、改革の取組や教育成果に応じた財政支援のメリハリ付けの強化等により、少子化の進展や厳しい財政状況等の中でも、次代を担う人材育成の取組の質を向上させる。

①OECD・PISA調査等の各種調査における水準の維持・向上

KPI第2階層

○教師のICT活用指導力の向上
○ICT機器の活用による児童生徒の変容等の情報活用能力に関する指標の設定

KPI第1階層

○学習者用コンピュータの整備状況
○高速大容量の通信ネットワークの整備状況
○学習者用デジタル教科書の整備状況
○情報通信技術支援員（ICT支援員）の活用状況
○ICT活用指導力に関する研修を受講した教員の割合
○統合型校務支援システムの導入率

2. 狙い

教育の情報化の加速（主にGIGAスクール構想）に関する効果を検証し、今後の効果的な施策を検討する。

3. 具体的な検証項目

担当府省	対象施策	工程表の箇所	確認するエビデンス等	予定	必要なデータ例
1 文科省内閣府	教育の情報化の加速（主にGIGAスクール構想）	文教2-2 (p91・92)	どのような環境を整備すれば、1人1台端末の効果的な活用に繋がるのか	<ul style="list-style-type: none"> 内閣府と文科省で設置している研究会において、児童生徒の個人単位のデータを用いた分析を実施し、年内に一定の取りまとめを行う（参考資料1～4） 具体的な端末の活用事例の分析に向け、個別自治体との連携を見据えて関係機関等と調整する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育の情報化の実態等に関する調査のデータ 全国学力・学習状況調査のデータ 情報能力活用調査のデータ 自治体独自の学力調査のデータ <p>等</p>

【文教・科学技術：1. 少子化の進展を踏まえた予算の効率化と教育の質の向上】

1. 教育の情報化の加速（主にGIGAスクール構想）

エビデンス構築の進捗状況

（1）ICT機器の活用による児童生徒の変容等の分析

昨年度行ったICT機器の活用状況に関する分析を受け、

- ① 全国学力・学習状況調査（保護者に対する調査含む）を用いて、世帯収入、両親の学歴を基に算出したSES（社会経済的背景）指標によりサンプルを分割した上で、効果の違いを検証。
- ② 埼玉県学力・学習状況調査を用いて、ICTの活用方法による効果の違いを検証。

（2）検証結果

- ① 国語・算数ともに中程度のICTの利用頻度で最も学力（偏差値）が高く、特にSES指標が小さい階層において、他の階層より大きな効果。算数では、全ての階層において利用頻度と学習意欲の正の相関を確認。
- ② 学習ソフト（ドリルを除く）の利用や、インターネットで調べものを行っている場合に国語の学力が高い傾向にある。また、ドリルなどの学習や学習ソフト（ドリルを除く）の利用をしている場合に算数の学力・学習意欲が高い傾向にある。

（3）その他

既存調査のみでは十分に把握できない項目について議論。

今後の予定

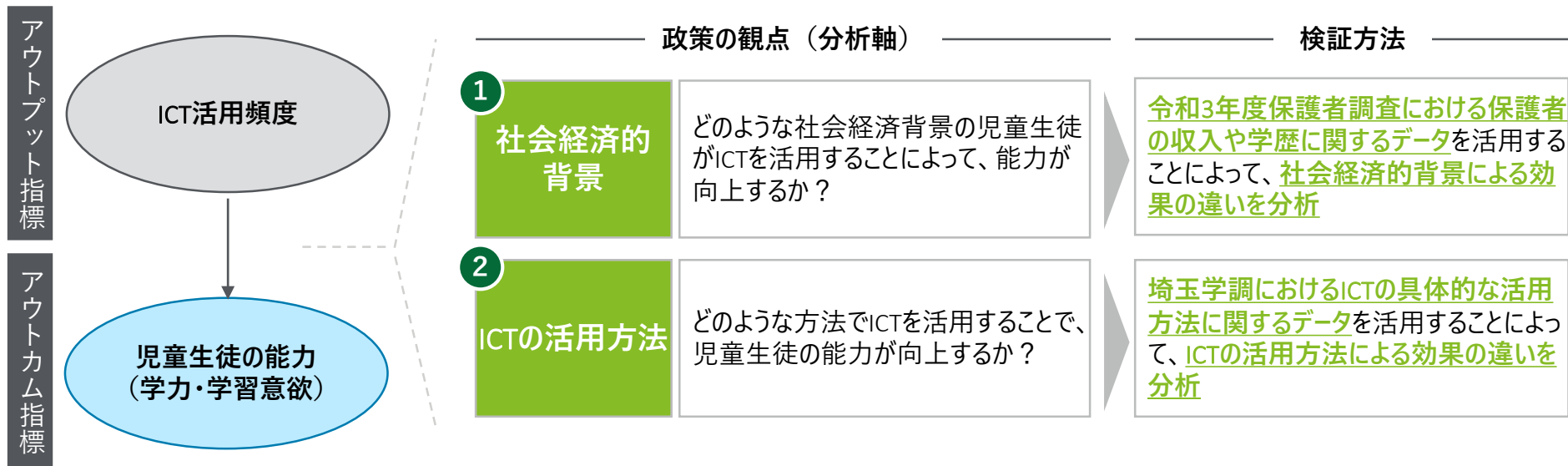
（1）新たなKPIの検討

上記の検証結果を踏まえ、新たなKPIの設定を検討する。

（2）新規アンケート調査の実施の検討

既存統計調査では十分に把握ができない情報（例えば、教員情報や家庭における端末の使い方など）を
試行的に得るため、新規アンケート調査の実施を検討。

社会経済的背景やICTの活用方法による効果の発現の違いを児童生徒単位で検証



調査名	利用年度	実施主体	対象	本分析で使用した主な調査項目
① 社会経済的背景				
全国学力・学習状況調査	令和3年度	文部科学省	児童生徒・学校単位で悉皆	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 正答率 (国語、算数) ✓ 学習意欲 (国語、算数) ✓ ICT利用頻度 等
全国学力・学習状況調査 (保護者に対する調査)	令和3年度	文部科学省	対象校における児童生徒の保護者	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 世帯収入 ✓ 両親の学歴
② ICTの活用方法				
埼玉県学力・学習状況調査	令和2年度、令和3年度	埼玉県	児童生徒・学校単位で悉皆	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 学力スコア (国語、算数) ✓ 学習意欲 (算数) ✓ ICT利用頻度 ✓ ICT利用方法 等

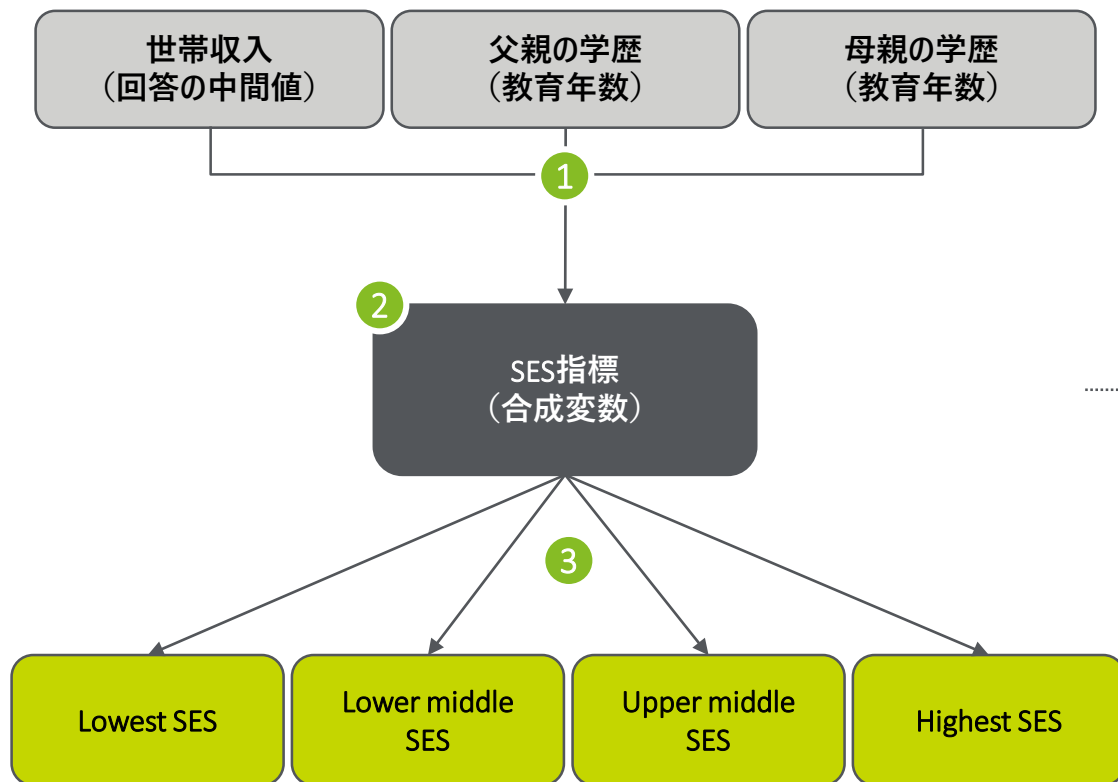
①社会経済的背景（全国学力・学習状況調査、保護者に対する調査）



SES指標を用いて4階層に分割し、
階層別にサンプルを分けて分析

※平日や休日の学習時間、読書時間、通塾の有無、学校ダミー等を制御変数としてコントロールしている

【SES指標（合成指標）の作成】



1

世帯収入（回答の中間値）、父親の学歴（教育年数）、母親の学歴（教育年数）をそれぞれ標準化（平均0、標準偏差1）する

2

標準化した3指標の平均値を算出する
(以降、SES指標（合成指標）と呼ぶ)

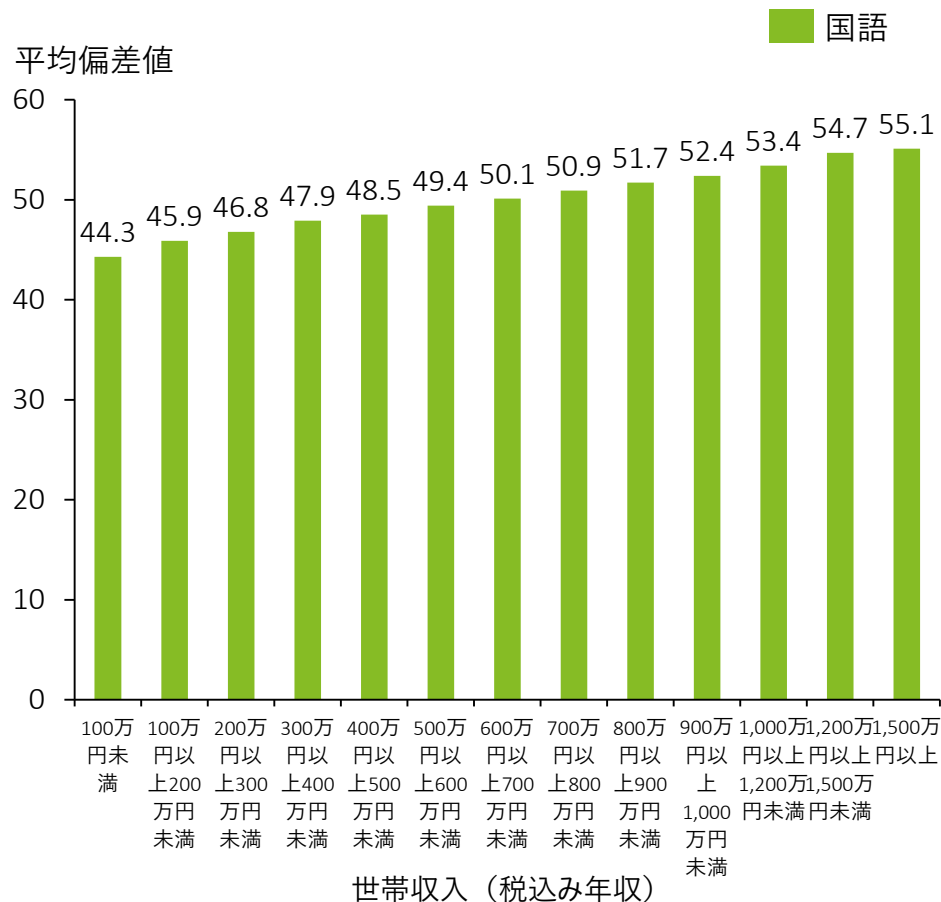
3

SES指標（合成指標）を4分割し、Lowest SES、Lower middle SES、Upper middle SES、Highest SESの4階層に分ける

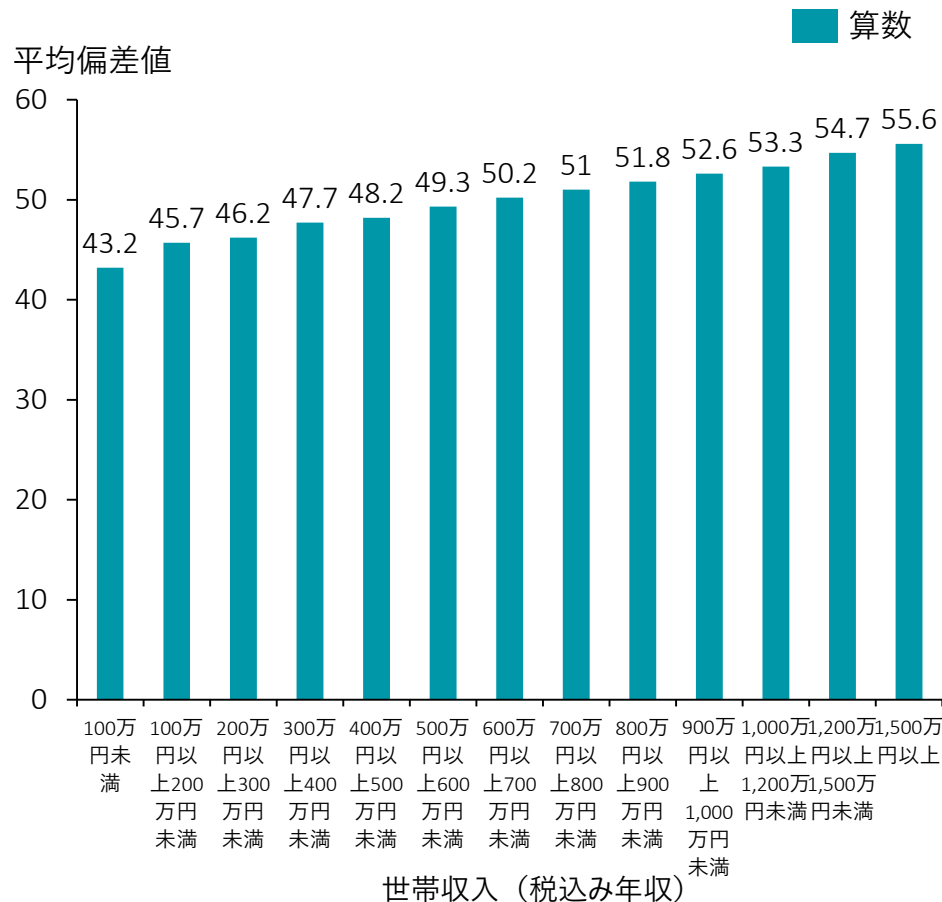
国語・算数ともに、世帯収入が高い層ほど児童の平均偏差値がより高い傾向にあることから、世帯収入と学力には相関性があると言える

世帯収入別の平均偏差値（小学校6年生）

世帯収入別の国語の平均偏差値



世帯収入別の算数の平均偏差値



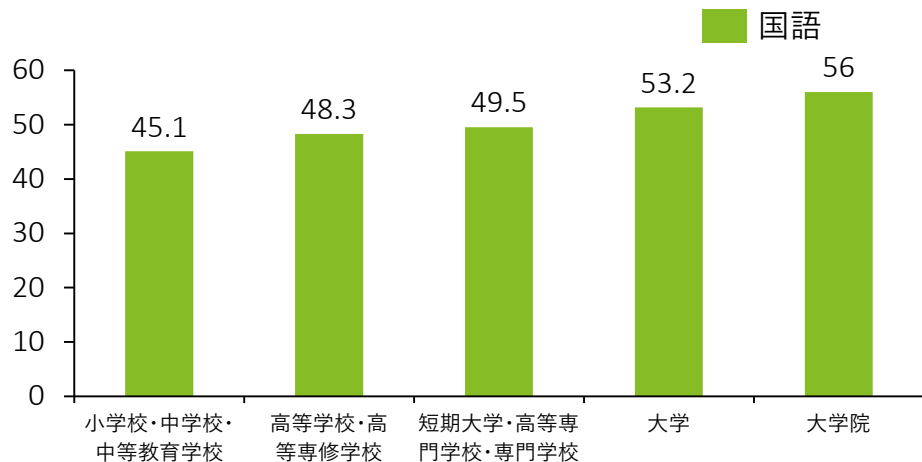
※児童の正答率は偏差値へ変換している

偏差値 = (児童の正答率 - 全国平均) / 全国標準偏差 × 10 + 50

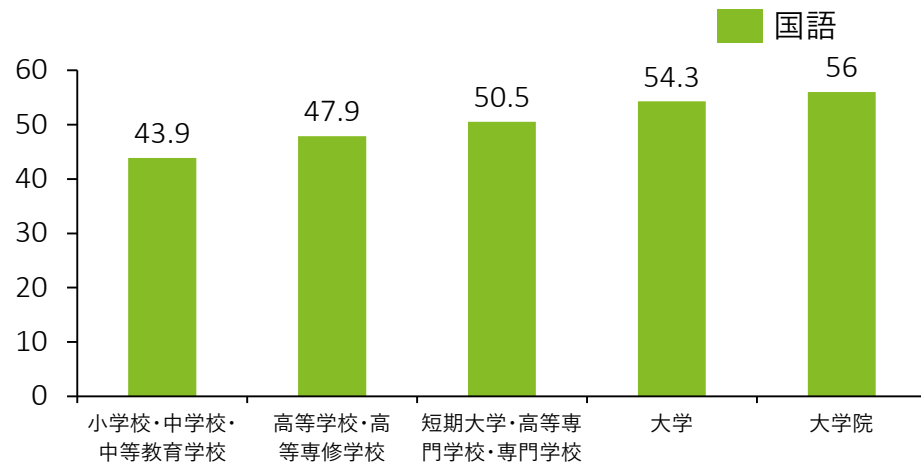
国語・算数ともに、父親や母親の学歴が高い層ほど児童の平均偏差値がより高い傾向にあることから、両親の学歴と学力には相関性があると言える

両親の学歴別の平均偏差値（小学校6年生）

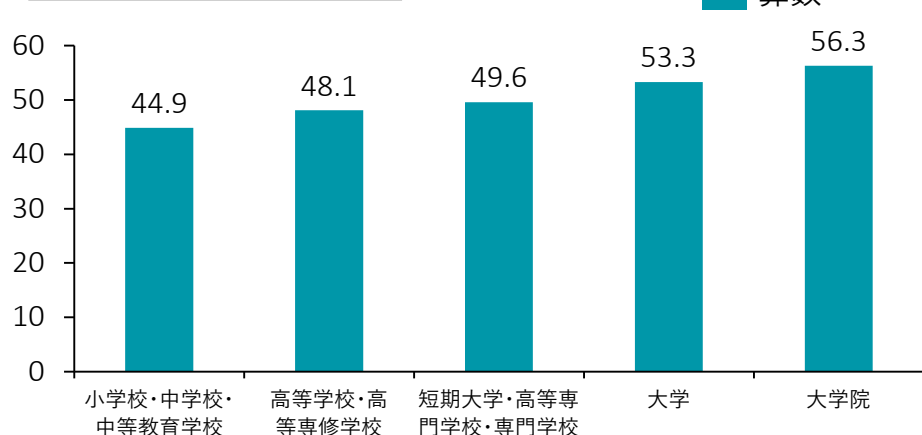
父親の学歴別の国語偏差値



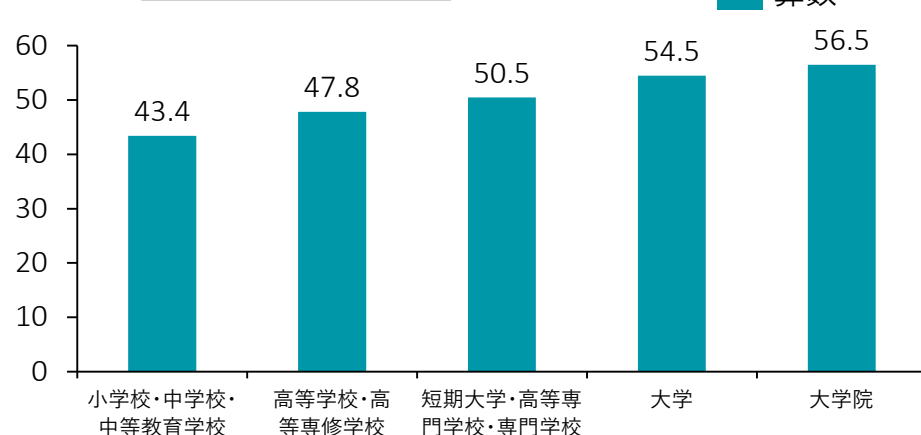
母親の学歴別の国語偏差値



父親の学歴別の算数偏差値



母親の学歴別の算数偏差値



※児童の正答率は偏差値へ変換している

偏差値 = (児童の正答率 - 全国平均) / 全国標準偏差 × 10 + 50

国語・算数ともに中程度の利用頻度で最も学力（偏差値）が高い。算数では全ての階層において利用頻度と学習意欲の正の相関が確認できた

重回帰分析の推定結果サマリ：SES階層別におけるICT利用頻度の効果

分析結果②

国語の学習意欲では、Lowest SESにおいて、利用頻度の増加に応じて、学習意欲の増加幅が最も大きいという結果になった。

SES階層	ICT利用頻度ダミー	学力（偏差値）		学習意欲	
		国語	算数	国語	算数
全体サンプル	月1回以上週1回未満	1.730***	1.478***	0.145***	0.106***
	週1回以上	0.617***	0.428*	0.156***	0.156***
Lowest SES	月1回以上週1回未満	2.385***	1.938***	0.153***	0.089*
	週1回以上	0.792*	0.566	0.188***	0.147***
Lower middle SES	月1回以上週1回未満	1.445***	1.648***	0.140***	0.119**
	週1回以上	0.742*	0.300	0.140***	0.183***
Upper middle SES	月1回以上週1回未満	1.121***	0.699*	0.134***	0.080*
	週1回以上	0.571	0.395	0.153***	0.139***
Highest SES	月1回以上週1回未満	1.321***	0.755**	0.135***	0.093**
	週1回以上	-0.197	-0.200	0.108**	0.137***

※平日や休日の学習時間、読書時間、通塾の有無、学校ダミー等を制御変数としてコントロールしている

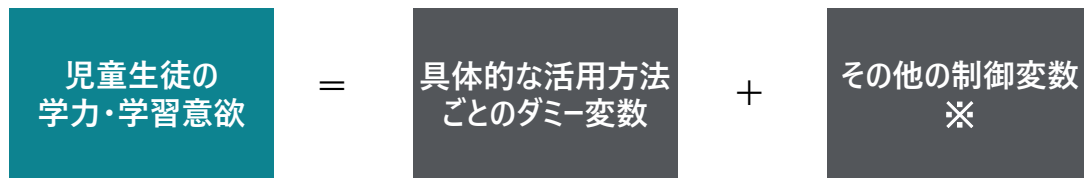
分析結果①

学力では、中程度の利用頻度が最も学力（偏差値）が高い。
ICT利用頻度が高くなるほど、学力（偏差値）が高くなる傾向は見られなかった。
特にLowest SES層において最も学力が高い傾向が見られた。

分析結果③

算数の学習意欲では、すべての階層においてICT利用頻度との正の相関が確認できた

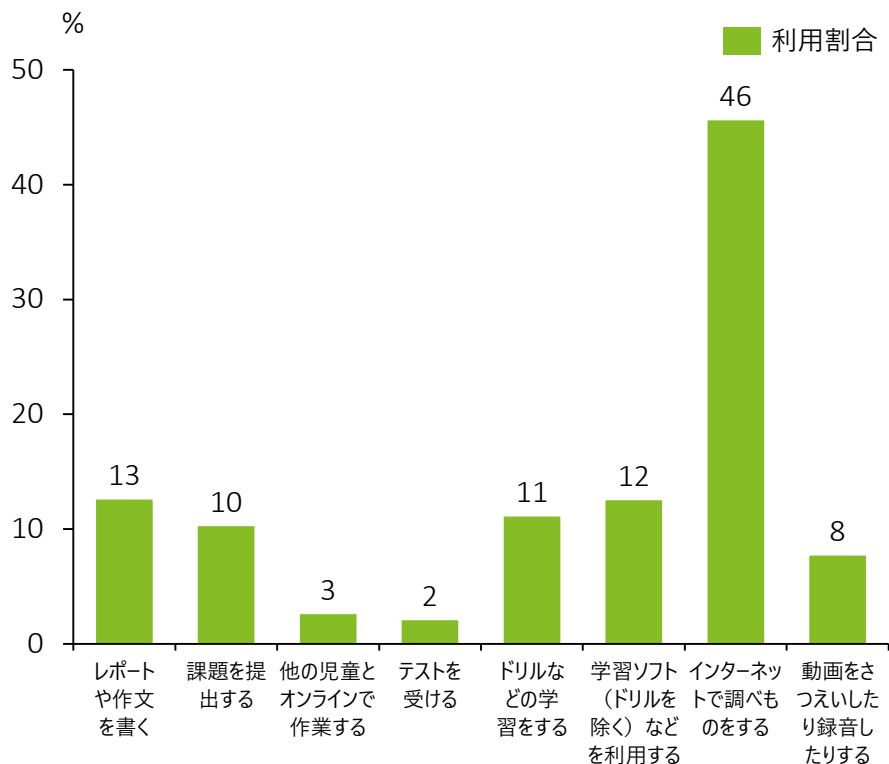
② ICTの活用方法（埼玉県学力・学習状況調査）



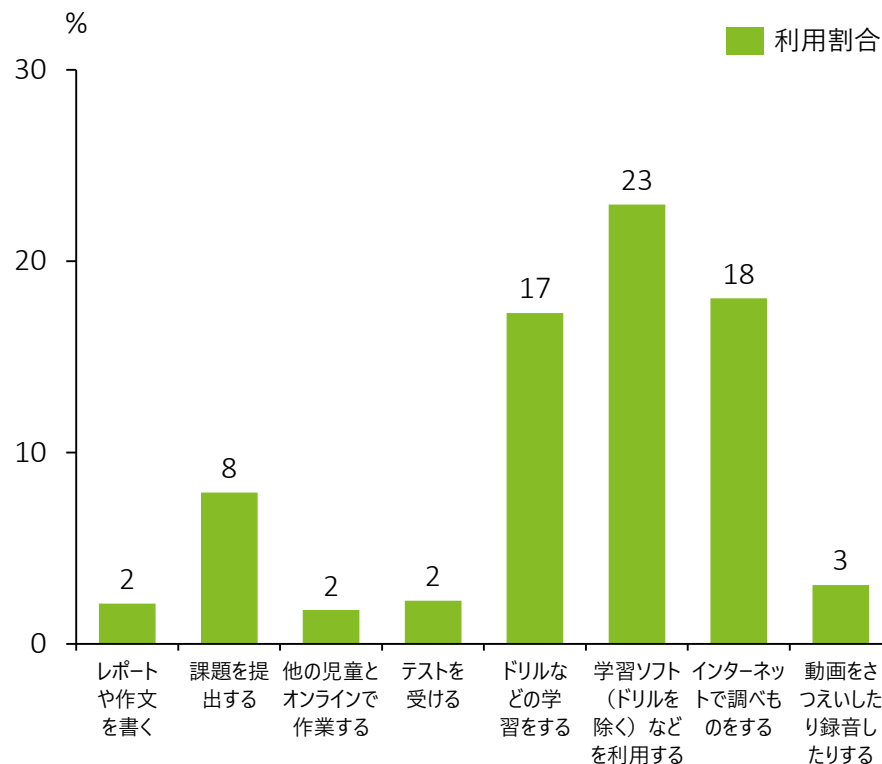
※平日や休日の学習時間、読書時間、通塾の有無、学校ダミー、前年度の学力スコア等を制御変数としてコントロールしている。

5年生時点の授業におけるICTの具体的な使い方の回答割合（令和3年度埼玉県学力・学習状況調査/小学6年生）

国語の授業でパソコンやタブレットなどの機器をどのように利用しましたか。
当てはまるものすべてをマークしてください



算数の授業でパソコンやタブレットなどの機器をどのように利用しましたか。
当てはまるものすべてをマークしてください



人数	5,806人	4,743人	1,199人	953人	5,124人	5,778人	21,077人	3,554人
----	--------	--------	--------	------	--------	--------	---------	--------

人数	969人	3,656人	814人	1,041人	7,993人	10,611人	8,345人	1,418人
----	------	--------	------	--------	--------	---------	--------	--------

学習ソフト（ドリルを除く）の利用や、インターネットで調べものをしている場合に端末を利用していない人に比べて国語の学力が高い傾向にある。また、ドリルなどの学習や学習ソフト（ドリルを除く）の利用をしている場合に算数の学力・学習意欲が高い傾向にある

重回帰分析の推定結果サマリ：ICTの使い方による効果

分析結果②

算数の学力では、「ドリルなどの学習をする」、「学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する」の2つの使い方において、平均学力が有意に高い傾向にある

利用頻度	使い方ダミー	学力（スコア）		学習意欲
		国語	算数	算数
全体サンプル	① レポートや作文を書く	0.010	-0.113***	0.055
	② 課題を提出する	-0.053**	-0.030	0.086**
	③ 他の児童とオンラインで作業する	-0.002	-0.036	0.041
	④ テストを受ける	-0.154***	-0.077**	0.088
	⑤ ドリルなどの学習をする	0.005	0.057***	0.102***
	⑥ 学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する	0.094***	0.094***	0.123***
	⑦ インターネットで調べものをする	0.061***	-0.035**	0.033
	⑧ 動画をさつえいしたり録音したりする	-0.056**	-0.077**	-0.052

※平日や休日の学習時間、読書時間、通塾の有無、学校ダミー、前年度の学力スコア等を制御変数としてコントロールしている
（学習意欲は、令和2年度（4件法）と令和3年度（5件法）で設問の選択肢が異なり、比較が困難であるため、前年度水準は制御していない）

分析結果①

国語の学力では、「学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する」、「インターネットで調べものをする」の2つの使い方において、平均学力が有意に高い傾向にある

分析結果③

算数の学習意欲では、「ドリルなどの学習をする」、「学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する」の2つの使い方において、平均学習意欲が有意に高い傾向にある

利用頻度を揃えた分析においても、週1～2回以上、月1～2回以上週1～2回未満利用している人について、全体サンプルと概ね同様の結果が得られた

重回帰分析の推定結果サマリ：ICT利用頻度別のICTの使い方による効果

利用頻度	使い方ダミー	学力 (スコア)		学習意欲
		国語	算数	算数
週1～2回以上	① レポートや作文を書く	0.047	-0.115**	-0.012
	② 課題を提出する	0.022	0.008	0.089*
	③ 他の児童とオンラインで作業する	0.041	0.008	0.047
	④ テストを受ける	-0.111*	-0.040	0.140*
	⑤ ドリルなどの学習をする	0.044	0.131***	0.106**
	⑥ 学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する	0.125***	0.169***	0.121***
	⑦ インターネットで調べものをする	0.162***	0.020	0.094**
	⑧ 動画をさつえいしたり録音したりする	-0.054	-0.042	0.021
月1～2回以上週1～2回未満	① レポートや作文を書く	0.009	-0.105	0.125
	② 課題を提出する	-0.093*	0.059	0.099
	③ 他の児童とオンラインで作業する	-0.028	0.108	0.256*
	④ テストを受ける	-0.217**	0.008	0.046
	⑤ ドリルなどの学習をする	0.016	0.042	0.119*
	⑥ 学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する	0.140***	0.131***	0.164***
	⑦ インターネットで調べものをする	0.106***	-0.030	0.097*
	⑧ 動画をさつえいしたり録音したりする	0.012	-0.040	-0.044

分析結果②

算数の学力では、「学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する」において、平均学力が有意に高い傾向にある

分析結果①

国語の学力では、「学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する」、「インターネットで調べものをうする」の2つの使い方において、平均学力が有意に高い傾向にある

分析結果③

算数の学習意欲では、「学習ソフト（ドリルを除く）などを利用する」において、平均学力が有意に高い傾向にある

※平日や休日の学習時間、読書時間、通塾の有無、学校ダミー、前年度の学力スコア等を制御変数としてコントロールしている
（学習意欲は、令和2年度（4件法）と令和3年度（5件法）で設問の選択肢が異なり、比較が困難であるため、前年度水準は制御していない）